24.子どもの貧困から考えるコミュニケーション：家族の大切さを知る

杉岡采音

はじめに

筆者は、最近このテーマについて考えさせられる出来事があった。筆者の家族は 5 人家族で兄弟構成が大学生の筆者と、高校 3 年生の弟、小学 6 年の妹という家族構成である。筆者と弟は年も近いし、筆者は第一子だったり、筆者と弟の時代もほぼ変わらない状況で、親が金銭面的にも家庭環境的にも余裕があった。しかし、年が 8 歳も離れている妹は、筆者や弟とは時代も違うし、大学により学費がかかったり、弟は大学受験や、これから大学の入学金など諸々で今までよりもお金がかかったり大事な時期で忙しくきつい状況が重なっている。それにより、金銭面的にもそうだが、家庭環境にも変化があり、親は筆者や弟の時より、妹に関わる時間が少なくなっているのではないかと考えた。筆者や弟の時は習い事もやっていて、それに対して勢力的であったりもした。しかし、忙しくなった今、親が妹に面倒を見る余裕が少なくなったと感じるようになった。その環境と一概には言えないが、筆者や弟と比較して妹は、どこか性格や学力が少し違うなと考えるようになった。

筆者は身近な家族でこのテーマを考えるきっかけとなったが、まだ筆者の家庭は問題と考えるものではないが、このような状況や類似する家庭は自分たちだけではないだろうと考えた。これより重度になったものは子どもの貧困に至ってしまうのかもしれないと考えた。今までは、政府はお金が無いから補助すれば家庭も豊かになるだろう、衣食住が満たせるなら貧困だと大騒ぎすることはないのではという考えに基づく制度や政策も多い。その制度や政策だけでなく、本論文では、家庭環境が疎かになっていたり、コミュニケーションがなければ子どもの貧困は無くならないと考える。そこで、子どもの貧困による影響はどのようなものがあるのか、普通の家庭に見えても隠れた子どもの貧困について知り一般家庭から貧困になりうる可能性や目に見えない物ではない貧困について考え、子どもの貧困になる要因を考えて、今後どのように対策していくか考えることにした。

1 章　子どもの貧困による影響

子ども時代の貧困による影響は、どのようなものがあるのか、今までの研究によると以下のものが上がっている。

1 つ目は、学力や学歴が低くなるリスクがあること。21 世紀に入った現代日本において、義務教育で当然のごとく身につけるはずである基礎的な学力さえ取得できない子どもが増えている。2 つ目は、健康状態が悪くなるリスクがあること。3 つ目は大人になっても貧困であるリスクが高いことである。子どもの貧困は、成人期となってからの賃金な生産性も低くするので、社会全体にも大きな損失となる。

また、学歴、雇用状況、収入、犯罪歴などが子どもの貧困と関係していると見解されている。子どもの貧困経験が大人になってからの所得や生活水準、就労状況にマイナスの影響を及ぼすから、その「不利」がさらにその次の世代に受け継がれてしまう。

4 つ目は現代日本が一番重要視するべきことである、周りの友達はできるのに自分にはできないという環境により、子ども自身の自己肯定感が下がってしまうことである。例えば、A 子ちゃんは新しい綺麗な服持っているのに、自分は古くて汚い服しか着れない、あの子は塾に通ってるのに、自分は行けないなどと他者に比べられることによる劣等感や絶望感な

ども子どもの貧困に至る原因でもある。「自分だけできない」がというのが将来の可能性を狭める可能性もある。自己肯定感の低さは学力格差とも関連している。また、社会的経験の欠如によって、子どもたちの教育の機会がなくなることもある。「機会や経験の欠如」が重なると、コミュニケーション能力や自我の発達など、現代社会で生きていくために必要な能力が身につかず、生涯にわたって影響を及ぼす可能性もある。学力の格差は就学の格差につながり、就学の格差は所得の格差につながり貧困の連鎖が生まれるひとつの背景になる。こういった問題が経済的に大きな損失となり、日本全体にとって将来負担が増えてしまう。

2 章　子どもの貧困対策

ここでは、貧困になってしまった場合または、ならないための子どもの貧困対策や、支援について述べる。

1 つ目は、貧困対策としての保育である。重要なのは、親の就労対策としての保育政策ではなく、子どもの貧困対策としての保育政策であることだ。単に親が働けるように「子どもを見ている」ことを目的とするのではなく、貧困世帯の子どもと親に積極的に働きかけ、貧困の影響を最小限に食い止めることを目的とする制度でなければ、その制度設計から大きく異なってくる。子どもの発達のチェック、健康や生活問題の早期発見、医療サービス(検診、予防接種、病気児のケア)、栄養の改善(給食や補助的栄養の提供、栄養指導)、知的・情緒的発達の促進(遊びと学び)、コミュニケーション・スキルの促進などの目的とする保育サービスが重要である。実際に、日本の保育所は、これらの多くのサービスをすでに提供している。また、保育所のすばらしいところは、「問題を抱えている子ども用のプログラム」として認識されておらず、あらゆる所得階層の子どもたちが通っているところである。すなわち、普遍的なサービスでありながら、特別な配慮が必要な子どもたちを支援することが可能なのである。しかし、実際の現状として保育所てはそこまでの支援は困難であるのも事実である。彼や彼女らは、保育や幼児教育の専門家であっても、福祉の専門家ではないからである。また、このような仕事は、何人もの乳幼児の世話をするかたわらにできるような仕事ではない。これを解決するには、家庭の問題にまで踏み込んで解決できるスタッフの数と専門性が必要である。また、保護者の生活支援では、社会的孤立を深刻化させることのないように配慮して対策を推進するとしている。家計相談事業の実施や家庭生活支援員の派遣等、保護者の自立支援などもある。

2 つ目は放課後(子どもの居場所)プログラムである。子どもにとって、学校が終わってからあとの時間は長い。親が帰ってくるまで数時間あったり、夏休み、春休み、日祭日など、「学校外」の時間は非常に長い。この時間を、誰と、どのように過ごすかは、毎日のことであるだけに、子どもの将来に大きく影響してくる。欧米においては、放課後に子どもが放置されている時間が長いことによる弊害として、事故や犯罪などに巻き込まれる危険、非行などの問題行動の増加、学力の低下、体力の低下、学校で育まれないスキル(音楽など)の未発達などがあげられている。前者の二つは、大人の監視下にいない時間が長いこと、後者の二つはその時間帯に非貧困の子どもたちは学習塾、サッカー教室などのスポーツ、音楽やダンスといった習い事をしているのに対し、放課後に放置されている子どもたちは家の中で、テレビやゲームなどで時間を過ごしたりすることによる。日本においても少し前であれば、ほとんどの子どもたちが家の周りや公園で活動的に友だちと遊んでこの時間を過ごしていた

が、現在においては、欧米と同じような状況である。日本で取り組まれている放課後プログラムの一つは各自治体が行なっている学童保育である。しかし、現状においては、学童保育は親が働いているなどの理由で「保育に欠ける」子どもたちを「一人で家においておくのは危ない」ので提供する「保育サービス」として設計されていることである。すなわち、放課後格差の弊害のうち、一つ目の「事故や犯罪などに巻き込まれる危険」という弊害のみにしか対処していないのである。そのため、放課後格差を積極的に解消するという観点からは物足りないものになっている。

放課後プログラムの基本的な概念として、中高生も含めた子どもの居場所づくりである。「家に大人がいない」などといった「保育に欠ける」子どもたちを管理する場所ではなく、子どもたちが自発的に行きたいと思える「居場所」を提供することである。そこにさえ行けば、子どもが安心してなんでも相談できる大人がおり、魅力的な活動があり、友達がいる。「家」「学校」が、必ずしも安らぐ場所でない子どもたちにとっての「ほっとできる」場所である。例えば、居場所にアートやスポーツ、行事ごとなどのイベントは活動を取り入れてみるというのも１つの策だろう。中高生の重要な居場所として、クラブ活動、部活などあるが、子どものおかれている経済状況を必ずしも把握していないので費用がかかる場合がある。

「居場所」事業においてはどのようなスタッフがその場にいるかも大事なポイントである。子どもたちが抵抗なく来れ、相談でき、何気なく変化を察知してもらえる人材が求められる。また、放課後プログラムの最も大きな成果があげられているものとしては、「メンタープログラム」というものがある。これは、「信頼のおける相談相手」を作るといったものだ。多くのボランティアの大人と子どもとを、それぞれの属性や趣味の相性などで綿密にマッチングしその子どもとボランティアが一定間隔で会って活動を行うプログラムである。ボランティアが子どもと行う活動はさまざまである。かっちりと組まれた学習プログラムに沿って、勉強を教えるプログラムもあれば、キャッチボールやバスケットボールをしたり、美術館や博物館に出かけたりといった「普通のお兄さん・お姉さん」のような活動を行なっている。子ども食堂もこの１つに入る。これらにより、不登校日の減少、勉強に対する自信のあらわれ、薬物使用・飲酒の減少、暴力行動の減少、将来の希望、自己肯定感の強化、人間関係の改善などにおいてプラスの効果が実証されている。

3 つ目は学力格差の縮小である。たとえ、教育費はお金で解決することができるが、学力の問題ははっきりとした解決策がわかっていない。学力格差により周りと差ができ、学校行きたくないなど、悪循環に発展しかねない。それに対して、比較的有望な政策と考えられているのが、少人数学級である。学級規模の縮小である。これも真剣に検討すべき政策だといえる。また、「学校」を 子どもの貧困対策のプラットホームと位置付けて総合的に対策を推進するとともに、教育 費負担の軽減を図ることを掲げている。学校を窓口とした福祉関連機関との連携、経済的支援を通じて、総合的に対策を推進することを図っている。

子どもの貧困対策の今後の課題と言われているは、各地域や学区での実態把握や各地域事情に応じた支援の充実、既存の貧困状態の子どもに長期に関わる支援体制などある。

おわりに

ここまで子どもの貧困に対する今までの研究で影響、原因、対策と述べてきた。結論でい

うと、子どもの貧困は将来の日本に関わる重要な問題であることがわかり、政府や自治体も色々と事業や政策をうっている。ゼミを通して行っていた子ども食堂でも多くの企業や自治体も協力していて、ボランティアの活動に勢力的な企業や自治体が増えるのも納得なことだと考えた。子ども食堂の最初設立はご飯がしっかり食べられない子のためという目的だったかもしれないが、宿題を見てもらったり、外で遊んだり、色々な大人と関わり合いを持てたりするなど、色々な経験ができたり、その場で友達もできたり、孤立も防ぎ、学力、機会などの格差縮小の良い場であると考える。そして、普通の家庭からでも子どもの貧困は起こる可能性はある。なので、子ども期の親の関わり方はすごく重要であると実感した。しっかり、親と子でコミュニケーションをとって、普段の何気ない会話をしっかり聞いてあげたり、相談にのって耳をしっかり傾けることが重要だと考える。身近にお姉ちゃん、お兄ちゃんがいるということは子どもにとって重要な学ぶ場のひとつになるのだろうと考えた。筆者も家で妹の話を流してしまうこともあったが、しっかり聞いてあげることが重要だと考えた。勉強や学校生活の事友達のことあらゆる話からその子が抱えている問題も発見できるかもしれないので、とにかく関わり合いをもつことは大事なことであり、問題を発見する重要な手がかりになると考える。そこで本稿は、親向けの対策としては、子どもに対する日常の関わり方やコミュニケーションについての講座やママ友を作るための会などを行い知識を身につけ、同じ境遇の親同士相談し合える仲になると良いと考える。子ども向けには、今も行われているが、子ども食堂や、学習支援をもっと増やしていけると良いと考える。ボランティア活動であるが、前に筆者が参加した子ども食堂に教師を目指す学生が参加してきた事があって、その事から教師を目指す人は教職の講座と同じようにカリキュラムの一環として子ども食堂にボランティア活動をしに行くことというのを入れることも良いのではと考えた。他には、学校自体で親と子がコミュニケーションを取れる課題や宿題などを取り入れて見るだけでも家庭に親子のコミュニケーションが増えるきっかけにもなるのではないかと考えた。子どもの貧困を減少させていくのは難しい事だが、親と子それぞれに目を向けて各地域や家庭によって事情や現状があるのでそれぞれ対策をうっていく必要がある。すぐには効果が出ないだろうが、子どもの貧困というテーマが自分には関係ないと考えないで、子どもがいる人いない人どちらも将来の日本にも大きく関わる問題であるため、みんなで考えていかなければならない問題だと考える。

参考文献

・阿部彩『子どもの貧困－日本の不公平を考える』
・貧困が子どもから奪うものとは、何か？【子どもの貧困】
https://florence.or.jp/news/2017/11/post21268/
・「子どもの貧困」がもたらす心への影響 就職や結婚にまで深刻な影響を及ぼす可能性も
https://www.dailyshincho.jp/article/2018/03080615/?all=1
・日本における子どもの貧困問題と社会の在り方
http://www.f.waseda.jp/k_okabe/semi-theses/1716yuri_murakami.pdf
・学ぶツアー>日本の現状>子どもの貧困の原因-SITK 子供貧困サミット
http://child-poverty-summit.jp/4_1.html

天白子ども食堂

1. 子ども食堂紹介	
場所：地下鉄原駅ターミナルビル３階 （名古屋市天白区原１丁目３０１番地） 代表：佐藤浩子さん 初回：2016 年 4 月 23 日（日）11 時～ 参加日時：2018 年 6 月 10 日（日） 参加費：子ども無料・大人 300 円 参加人数：子ども 20 人ほど、親 10 人ほど、ボランティア 15 人ほど 献立：五目冷や麦、野菜の天ぷら、キャベツとつなのサラダ、さくらんぼ 参加・記録者：杉岡采音	
2. 当日の流れ	
9：30～　スタッフ・ボランティア集合 10：00～　受付開始、調理手伝い（スタッフ・ボランティア） 安江工務店さんによる射的、輪投げ、手作りおやつ(バナナシャーベット) 11：00～ 中村区ライオンズクラブによる寄付 12：00～　食事開始 13：00～　食堂終了、片付け 14：00～　解散	
3. 食材、献立	
食材　寄付された物を使用している。余ったものはスタッフやボランティアが持って帰れる。(今回は作った天ぷら、キャベツとツナのサラダを持ち帰り、最後にスタッフ全員が余った玉ねぎを 2 個ずつもらっていった。) 献立　毎月佐藤さんが寄付された食材を元に考えている。毎回子どもたちと一緒に作れるおやつも考えている。	
4 課題・思い	
もともと佐藤さん親子は、東日本大震災でうけた支援への恩返しと災害に備えて地域の絆を深めたいという思いから開店した。	
4. 感想	
最初食堂に入った時は緊張していたが、入ってから佐藤博文さんが話しかけてくれ当日の動きをおおまかに説明してくださった。スタッフの方とお話もでき楽しく過ごせて良かった。安江工務店さんが射的や輪投げを用意していて子どもたちはそれを楽しそうに遊んでいて、手作りおやつのバナナシャーベットもみんな興味津々に作っていて良かった。	

天白子ども食堂

1. 子ども食堂紹介	
場所：地下鉄原駅ターミナルビル３階 （名古屋市天白区原１丁目３０１番地） 代表：佐藤浩子さん 初回：2016 年 4 月 23 日（日）11 時～ 参加日時：2018 年 7 月 8 日（日） 参加費：子ども無料・大人 300 円 参加人数：子ども 20 人ほど、親 10 人ほど、ボランティア 15 人ほど 献立：チキンピラフ、ハムカツ、サラダ、ビシソワーズ、餃子、すいか 参加・記録者：杉岡采音	
2. 当日の流れ	
9：30～　スタッフ・ボランティア集合 10：00～　受付開始、調理手伝い（スタッフ・ボランティア） 11：30～ ラシードハウス丸山哲平さんによる餃子の差し入れ 12：00～　食事開始 13：00～　食堂終了、片付け 14：00～　解散	
3. 食材、献立	
食材　寄付された物を使用している。余ったものはスタッフやボランティアが持って帰れる。(今回は余ったお昼とスイカとお寺からの寄付のお菓子をスタッフでじゃんけんで勝った順にもらっていった。) 献立　毎月佐藤さんが寄付された食材を元に考えている。毎回子どもたちと一緒に作れるおやつも考えている。	
4 課題・思い	
もともと佐藤さん親子は、東日本大震災でうけた支援への恩返しと災害に備えて地域の絆を深めたいという思いから開店した。	
4. 感想	
今回は 2 回目ということもあり、動きがわかっていたのですんなりスタッフ活動ができた。前回と同じ子どもやスタッフもいて比較的リラックスしてできた。寄付でいただいたスイカの大きさにみんな興奮していた。子どもたちはビーズでブレスレットを作ったり風船で遊んでいたり楽しそうだった。	

天白子ども食堂

1. 子ども食堂紹介	
場所：地下鉄原駅ターミナルビル３階 （名古屋市天白区原１丁目３０１番地） 代表：佐藤浩子さん 初回：2016 年 4 月 23 日（日）11 時～ 参加日時：2018 年 10 月 21 日（日） 参加費：子ども無料・大人 300 円 参加人数：子ども 10 人ほど、親 10 人ほど、ボランティア 15 人ほど 献立：コロッケ、サラダ、洋風オムレツ、ミネストローネ、お月見だんご 参加・記録者：杉岡采音	

2. 当日の流れ
9：30～　スタッフ・ボランティア集合 10：00～　受付開始、調理手伝い（スタッフ・ボランティア） 12：00～　食事開始 13：00～　食堂終了、片付け 14：00～　解散

3. 食材、献立
食材　寄付された物を使用している。余ったものはスタッフやボランティアが持って帰れる。(今回は余ったコロッケと今回の献立では使わなかったが寄付してもらったピーマンをもらった) 献立　毎月佐藤さんが寄付された食材を元に考えている。

4. 感想
今回は学生ボランティアが多くて、中京生や名城生その他色々な学生がボランティアで来ていた。秋ということでお月見だんごを作り、ボランティアは餅まで作り、子どもたちが自分たちで粘土のような感覚で好きな大きさや形に整えて作ってもらい食べていた。ボランティアの数が多かったため、やる事が無くなることも少しあった。

天白子ども食堂

1. 子ども食堂紹介	
場所：地下鉄原駅ターミナルビル３階 （名古屋市天白区原１丁目３０１番地） 代表：佐藤浩子さん 初回：2016 年 4 月 23 日（日）11 時～ 参加日時：2018 年 11 月 25 日（日） 参加費：子ども無料・大人 300 円 参加人数：子ども 10 人ほど、親 10 人ほど、ボランティア 15 人ほど 献立：ハンバーグ、ポテトサラダ、冬瓜煮、ターメリックライス、おにまんじゅう 参加・記録者：杉岡采音	

2. 当日の流れ
9：30～　スタッフ・ボランティア集合 10：00～　受付開始、調理手伝い（スタッフ・ボランティア） 12：00～　食事開始 13：00～　食堂終了、片付け 14：00～　解散

3. 食材、献立
食材　寄付された物を使用している。余ったものはスタッフやボランティアが持って帰れる。 献立　毎月佐藤さんが寄付された食材を元に考えている。

4. 感想
今回は特定非営利法人のクラウンチョクさんという方がピエロになりバルーンアートを見せてくれた。できた作品は子どもにあげ、子どもも「欲しい!」と風船に興味津々だった。後半には子どもたちや親も一緒に風船で犬を作っていたり楽しそうだった。